

日蓮大聖人御書全集

いちだいいししょうぎょうたいい

一代聖教大意

新版
326
〜
348

いちだいししょうぎようたいい

一代聖教大意

しょうか ねん がつ にち

正嘉2年('58) 2月14日 37歳

しきよう

四教

いち さんぞうきよう に つうきよう さん べつきよう し えんぎよう

一には三蔵教、二には通教、三には別教、四には円教

なり。

はじ さんぞうきよう あごんぎよう こころ きよう こころ

始めに三蔵教とは、阿含經の意なり。この經の意は、

ろくどう ほか あ ろくどう じ が ちく しゆ にん てん

六道より外を明かさず、ただ六道（地・餓・畜・修・人・天）

うち いんが どうり あ しょうほう じっかい あ

の内の因果の道理を明かす。ただし、正報は十界を明かす

じ が ちく しゆ にん てん しょうもん えんがく ぼさつ ぶつ

なり。地・餓・畜・修・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏な

えほう むつ ろっかい もう おし 二二二

り。依報が六つにてあれば、六界と申すなり。この教えの意

ろくごう ほか あ さんがい ほか じょうど もう

は、六道より外を明かさざれば、三界より外に浄土と申す

しょうじよ さんぜ ほとけ しだいしだい しゆつせ

生処ありと云わず。また三世に仏は次第次第に出世すと

い よこ じつぼう なら ほとけ あ い

は云えども、横に十方に並べて仏有りとも云わず。

さんぞう いち きょうぞう い じょうぞう に りつぞう

三蔵とは、一には経蔵へまた云わく定蔵、二には律蔵

い かいぞう さん ろんぞう い えぞう

へまた云わく戒蔵、三には論蔵へまた云わく慧蔵なり。

きょう りつ ろん じょう かい え かい じょう え え じょう かい

ただし、経・律・論の定・戒・慧、戒・定・慧、慧・定・戒

かいぞう ごかい はっかい じっかい じゅうぜんかい

ということあるなり。戒蔵とは、五戒・八戒・十戒・十善戒・

にひやくごじっかい ごひゃっかい じょうぞう みぜん じょう な

二百五十戒・五百戒なり。定蔵とは、味禪へ定の名なり。

じょうぜん むろぜん えぞう
浄禅・無漏禅なり。慧蔵とは、く こう むじょう むが ちえ
り。 苦・空・無常・無我の智慧な

かい じょう え しょうれつ
戒・定・慧の勝劣というは、かみ かい たも もの
ただ上の戒ばかりを持つ者

さんがい うち よっかい じん てん しょう う ほんぶ
は、三界の内の欲界の人・天に生を受くる凡夫なり。ただ

かみ じょう しゆ ひと かい たも じょう ちから
上の定ばかりを修する人は、戒を持たざれども、定の力

よ かみ かい ぐ じょう うち みぜん じょうぜん
に依つて上の戒を具するなり。この定の内に、味禅・浄禅

さんがい うち しきかい むしきかい しょう むろぜん しょうもん えん
は、三界の内、色界・無色界へ生ず。無漏禅は、声聞・縁

がく な けんじ だん つ けしんめつち え
覚と成つて見思を断じ尽くし、灰身滅智するなり。慧はま

く こう むじょう むが われ しきしん かん かみ かい じょう
た苦・空・無常・無我と我が色心を観ずれば、上の戒・定を

じねん ぐそく しょうもん えんがく な ゆえ かい
自然に具足して、声聞・縁覚とも成るなり。故に、戒より

じょう すぐ じょう え すぐ
定は勝れ、定より慧は勝れたり。しかれども、この三蔵教

こころ かい ほんたい
の意は、戒が本体にてあるなり。されば、阿含経を総結す

ゆいきょうぎょう かい もう
る遺教経には戒を説けるなり。

おし こころ えほう ろっかい しょうほう じっかい あ
この教えの意は、依報には六界、正報には十界を明か

えほう したが ろっかい あ きょう な
せども、依報に随って、六界を明かす経と名づくるなり。

しょうほう じっかい あ えんがく ぼさつ ほとけ しょうもん
また正報に十界を明かせども、縁覚・菩薩・仏も声聞の

さごと す しょうもんきょう もう ほとけ ぼさつ
覚りを過ぎざれば、ただ声聞教と申す。されば、仏も菩薩

えんがく けしんめつち おし
も縁覚も灰身滅智する教えなり。

しょうもん
しちげん
しちしょう
くらい
ろくどう
ほんぷ
声聞について七賢・七聖の位あり。六道は凡夫なり。

いち
ごじょうしん
一、五停心

さんげん
に
べっそうねんじよ
二、別想念処

ち
さん
そうそうねんじよ
三、総想念処

しちげん
いち
なんぼう
一、煥法

に
ちようぼう
二、頂法

しぜんこん
さん
にんぼう
三、忍法

し
せだいいつぼう
四、世第一法

しちげん
くらい
ろくどう
ほんぷ
かしこ
しょうじ
いと
この七賢の位は、六道の凡夫より賢く、生死を厭い、

ぼんのう ぐ ぼんのう おこ かしこ ひと
煩惱を具しながら煩惱を発さざる賢き人なり。

れい げてん きよゆう そうほ
例せば、外典の許由・巢父がごとし。

いち すそく いき かぞ さんらん じ
一、数息 息を数えて散乱を治す

に ふじよう み ふじよう かん とんよく じ
二、不浄 身の不浄を觀じて貪欲を治す

さん じひ かん しつと じ
三、慈悲 慈悲を觀じて嫉妬を治す

し いんねん じゅうにいんねん かん ぐち じ
四、因縁 十二因縁を觀じて愚癡を治す

ご かいほうべん ち すい か ふう くう しき ろっかい かん しょうどう じ
五、界方便 地・水・火・風・空・識の六界を觀じて障道を治す

ごじようしん
五停心

また云わく「念仏」と

べつそうねんじよ よつ
別想念処に四つ
一、身 いち しん 外道は身を浄と云い、 げどう しん じよう い 仏は無浄と説きたもう
二、受 に じゆ 外道は三界を楽と云い、 げどう さんがい らく い 仏は苦と説きたもう
三、心 さん しん 外道は心を常と云い、 げどう しん じよう い 仏は無常と説きたもう
四、法 し ほう 外道は一切衆生に我有りと云い、 げどう いっさいしゆじよう があ い 仏は無我と説きたもう

げどう じよう しん
外道は常〈心〉・楽〈受〉・我〈法〉・浄〈身〉、らく じゆ が ほう じよう しん ほとけ 仏は苦・不浄・無常・無我と説く
そうそうねじよ
総想念処
さき く ふじよう むじよう むが しゆれん かん
先の苦・不浄・無常・無我を修練して観ずるなり

ねんぼう
煨法
ちえ ひ ほんのう まがき む けむり た ゆえ なんぼう い
智慧の火、煩惱の籬を蒸せば、煙の立つなり。故に煨法と云う

頂法 ちようぼう

山の頂やま いただきに登のぼつて四方しほうを見るみに曇くもり無なきがごとし。世間せけん・

出世間しゅつせかんの因果いんがの道理どうりを委くわしく知しつて闇くらきこと無なきに譬たとえた

るなり。始めはじめ五停心ごじようしんよりこの頂法ちようぼうに至いたるまでは退位たいいと申もうし

て、悪縁あくえんに値あえば悪道あくどうに墮おつ。しかれども、この頂法ちようぼうの善根ぜんこん

は失うせずならと習ならうなり

忍法 にんぼう

この位くらいに入いる人ひとは永ながく悪道あくどうに墮おちらず

世第一法 せだいいっぼう

この位くらいに至いたるまでは賢人けんじんなり。但今ただいま、聖人しょうにんと成なるべきなり

一、見道けんどうに二ふたつ

随信ずいしんぎよう行

鈍根どんこん

随法ずいほうぎよう行

利根りこん

正しょうということなり

一、信解しんげ

鈍根どんこん

七聖しちしょうに三みつつ

二、修道しゆどうに三みつつ

二、見得けんとく

利根りこん

三、無学道むがくどうに二ふたつ

慧解えげだつ脱

鈍どん

三、身証しんしょう

利り・鈍どんに亘わたる

阿羅漢あらかん

俱解くげだつ脱

利り

見思けんじの煩惱ぼんのうを断だんずる者ものを聖しょうと云いう。

この聖人しょうにんに三さん道どうあり。

けんどう

けんじ

うち

けんわく

だん

つ

けんわく

つ

見道とは、見思の内の見惑を断じ尽くす。この見惑を尽く

ひと

しよか

しろうじや

もう

ひと

よっかい

にん

てん

す人をば、初果の聖者と申す。この人は、欲界の人・天に

う

なが

じ

が

ちく

しゆ

しあくしゆ

お

は生まるれども、永く地・餓・畜・修の四悪趣には堕ちず。

てんだい

けんわく

やぶ

ゆえ

しあくしゆ

はな

もん

ひと

天台云わく「見惑を破るが故に、四悪趣を離る」文。この人

しわく

だん

とん

じん

ちしん

あ

とんよく

は、いまだ思惑を断ぜざれば、貪・瞋・癡身に有り。貪欲あ

ゆえ

めたい

たにん

め

おか

しんに

る故に、妻を帯す。しかれども、他人の妻を犯さず。瞋恚あ

ころ

すき

じ

耕

むしじねん

れども、ものを殺さず。鋤をもつて地をすけば、虫自然に

しすん

ぐち

ゆえ

わ

み

しよか

しろうじや

し

四寸去る。愚癡なる故に、我が身初果の聖者と知らず。

ばしや

い

しよか

しろうじや

めつま

はちじゆういちどいちや

おか

婆沙論に云わく「初果の聖者は、妻を八十一度一夜に犯す」

しゆい てんだい げしやく い しょか じ す むししすんはな
取意。天台の解釈に云わく「初果、地を耕くに虫四寸離る。

どうぐ ちから
道共の力なり」。

だいしか しょうじや あらかん むがく い ふしよう い
第四果の聖者・阿羅漢を無学と云い、また不生と云う。

なが けんじ だん つ さんがいるくどう しょう つ のち
永く見思を断じ尽くして、三界六道にこの生の尽きて後、

しょう けんじ ぼんのう な ゆえ
生ずべからず。見思の煩惱の無きが故なり。

おし こころ さんがいるくどう ほか ところ あ
またこの教えの意は、三界六道より外に処を明かさざ

ほか しょうじよあ し み ぼんのうあ し
れば、外の生処有りと知らず、身に煩惱有りと知らず。ま

しょういん けしんめつち もう み こころ 失 こくう
た、生因なく、ただ灰身滅智と申して、身も心もうせ、虚空

な なら ほけきょう なが ほとけ 成
のごとく成るべしと習う。法華経にあらずば永く仏になる

べからずと云うは、い二乗これなり。にじよう

おし

しゆぎよう

じせつ

しようもん

さんしよう

どんこん

ろくじつこう

この教えの修行の時節は、声聞は、三生へ鈍根・六十劫

りこん

いちるい

さいじようりこん

しようもん

いつしよう

うち

〈利根〉なり。また一類の最上利根の声聞は、一生の内

あらかん

くらい

のぼ

えんかく

ししよう

どんこん

ひやつこう

に阿羅漢の位に登ることあり。縁覚は、四生へ鈍根・百劫

りこん

ぼさつ

いつこうぼんぷ

けんじ

だん

〈利根〉なり。菩薩は、一向凡夫にて見思を断ぜず、しか

しぐせいがん

おこ

ろくどまんぎよう

しゆ

さんそうぎ

ひやくだいこう

も、四弘誓願を発し、六度万行を修し、三僧祇・百大劫を

へ

さんぞうきよう

ほとけ

な

ほとけ

な

とき

はじ

けんじ

だん

経て、三蔵教の仏と成る。仏と成る時、始めて見思を断

つ

じ尽くすなり。

けんわく

いち

しんけん

い

がけん

に

へんけん

見惑とは、一には身見へまた云わく、我見二には辺見

断見・常見、三には邪見、撥無見、四に

けんじゆけん

い

おと

すぐ

おも

けん

ご

は見取見、また云わく、劣れるを勝ると謂う見と、五には

かいこんじゆけん

い

いん

いん

けん

け

どう

戒禁取見、また云わく、因にあらざるを因と計し、道にあ

どう

け

けん

いん

いん

けん

け

どう

らざるを道と計する見と、なり。見惑は八十八有れども、

いつ

もと

けん

しわく

いち

とん

に

しん

この五つが本にてあるなり。思惑とは、一には貪、二には瞋、

さん

ち

し

まん

しわく

はちじゆういちあ

よつ

三には癡、四には慢なり。思惑は八十一有れども、この四

もと

つが本にてあるなり。

ほうもん

あごんぎようしじつかん

ばしやろんにひやつかん

しやうりろん

この法門は、阿含経四十卷・婆沙論二百卷・正理論・

けんしゆうろん

くしやろん

あ

べつ

くしやしゆう

もう

顕宗論・俱舍論につぶさに明かせり。別して俱舍宗と申す

しゅうあ

もろもろ

だいじょう

ほうもんしょうしょうあ

宗有り。また諸の大乗にこの法門少々明かしたるこ

い

ほうどうぶ

きょう

ねはんぎょうどう

けごん

とあり。謂わく、方等部の経、涅槃経等なり。ただし、華嚴・

はんにか

ほつけ

ほうもんな

般若・法華にはこの法門無し。

つぎ

つうぎょう

だいじょう

はじ

かい

じょう

え

さんがく

次に通教へ大乘の始めなり。また戒・定・慧の三学あ

おし

掟

たいし

ろくどう

い

しょうぶんりこん

り。この教えのおきて、大旨は六道を出でず。少分利根な

ぼさつ

ろくどう

ほか

お

い

しょうもん

えんがく

る菩薩、六道より外に推し出だすことあり。声聞・縁覚・

ぼさつ

とも

ひと

ほうもん

なら

けんじ

さんにんとも

だん

菩薩、共に一つ法門を習い、見思を三人共に断ず。しかれ

しょうもん

えんがく

けしんめつち

おも

い

もの

い

ども声聞・縁覚、灰身滅智の意いに入る者もあり、入らざ

もの
る者もあり。

おし
この教えに十地あり。
じゅうじ

いち けんねじ
一、乾慧地

さんげん
三賢

賢人

に しょうじ
二、性地

しぜんこん
四善根

けんどう くらい
見道の位

さん はちにんじ
三、八人地

しょうにん
聖人

し けんじ
四、見地

しょか しょうにん
初果の聖人

けんわく だん
見惑を断ず

じゅうじ
十地
ご へくじ
五、薄地

ろく りよくじ
六、離欲地

しわく だん
思惑を断ず

しち いべんじ
七、已弃地

あらかん
阿羅漢

けんじ だん っ
見思を断じ尽くす

八、辟支佉地
はち びやくしぶつじ

見思を尽くす
けんじ っ

九、菩薩地
く ぼさつじ

十、佉地
じゅう ぶつじ

見思を断じ尽くす
けんじ だん っ

この通教の法門は、別して一經に限らず、方等經・
はんによきよう しんきよう かんきよう あみだきよう そうかんきよう こんごうはんによきようとう
般若經・心經・觀經・阿彌陀經・双觀經・金剛般若經等
きよう さんごうい
の經に散在せり。

この通教の修行の時節は、動逾塵劫を経て佉に成ると
つうぎよう しゆぎよう じせつ どうゆじんごう へ ほとけ な
習うなり。また一類の疾く成るといふ辺もあり。
なら いちるい と な へん

已上、上の藏・通二教には、六道の凡夫本より佉性あり
いじよう かみ ぞう つうにきよう ろくどう ほんぷもと ぶつしよう

とも談だんぜず、始はじめて修しゆすれば声聞しやうもん・縁覺えんがく・菩薩ぼさつ・仏ほとけとおも
いおもいに成なると談だんずる教おしえなり。

つぎ べつきよう かい じよう え さんがく だん
次に別教。また戒・定・慧の三学を談ず。

おし ぼさつ しょうもん えんがく まじ
この教おしえはただ菩薩ぼさつばかりにて、声聞しょうもん・縁覺えんがくを雜まじえず。

ぼさつかい さんじゆじようかい ごかい はつかい じつかい じゆうぜんかい
菩薩戒ぼさつかいとは、三聚淨戒さんじゆじようかいなり。五戒ごかい、八戒はつかい、十戒じつかい・十善戒じゆうぜんかい、

にひやくごじゆつかい ごひやつかい ぼんもう ごじゆうはち かい しょうらく じゆうむじんかい
二百五十戒にひやくごじゆつかい、五百戒ごひやつかい、梵網ぼんもうの五十八の戒ごじゆうはち、瓔珞かいの十無尽戒しょうらく、

けごん じつかい ねはんぎよう じぎよう ごしかい ごた じつかい だいろん
華嚴けごんの十戒じつかい、涅槃經ねはんぎようの自行じぎようの五支戒ごしかい・護他ごたの十戒じつかい、大論だいろんの

じっかい みな ぼさつ さんじゆじようかい うち しょうりつきかい
十戒じっかい、これらは皆みな、菩薩ぼさつの三聚淨戒さんじゆじようかいの内うち、攝律儀戒しょうりつきかいなり。

しょうぜんぼうかい

はちまんしせん

ほうもん

せつ

にようやくうじようかい

撰善法戒とは、八万四千の法門を撰す。饒益有情戒と

しぐせいがん

じよう

かんれん

くん

じゆ

ししゆ

ぜんじよう

は、四弘誓願なり。定とは、観・練・薰・修の四種の禅定

え

しんしようじつかい

ほうもん

なり。慧とは、心生十界の法門なり。

ごじゆうにい

た

五十二位を立つ。

ごじゆうにい

いち

じっしん

に

じゆうじゆう

さん

じゆうぎよう

五十二位とは、一には十信、二には十住、三には十行、

し

じゆうえいこう

ご

じゆうじ

とうがく

ひと

くらい

みようかく

四には十回向、五には十地、等覚へ二つの位なり、妙覚

ひと

くらい

いじよう

ごじゆうにい

へ一つの位、已上、五十二位なり。

じっしん

十信

たいい

退位

ぼんぷぼさつ

凡夫菩薩。

けんじ

いまだ見思を断ぜず

じゆうじゆう

十住

十行 じゅうぎょう

不退位 ふたしい

見思・塵沙を断ぜる菩薩 けんじ じんじや だん ぼさつ

五十二位 ごじゅうにい

十回向 じゅうえこう

十地 じゅうじ

無明を断ぜる菩薩 むみょう だん ぼさつ

等覺 とうがく

妙覺 みょうかく

無明を断じ尽くせる仏 むみょう だん っ ほとけ

この教えは おし 大乘なり。戒・定・慧を明かす。戒は前の蔵・

通二教に似ず、つうにきょう に 尽未来際の戒、じんみらいさい かい 金剛法戒なり。

この教えの菩薩は、おし ぼさつ 三悪道をば恐ろしとせず、二乗の道にじょう どうを

三悪道と云う。地・餓・畜等の三悪道は仏の種子を断ぜず、さんあくどう い じ が ちくとう さんあくどう ほとけ しゆし だん

にじよう どう ほとけ しゆし だん だいしようごんろん い

二乗の道は仏の種子を断ず。大莊嚴論に云わく「つねに

じごく お だいぼだい さ じり こころ

地獄に処るといへども、大菩提を障えず。もし自利の心を

お だいぼだい さわ おし なら まこと

起こさば、これ大菩提の障りなり」。この教えの習いは、真

あくどう さんむい かきよう まこと あくにん にじよう た

の悪道とは三無為の火阨なり、真の悪人とは二乗を立つる

なり。されば、「悪をば造るとも、二乗の戒をば持たじ」と

だん 談ず。 あく つく にじよう かい たも

だん

談ず。

ゆえ だいほんにやきよう い ぼさつ ごうがしやこう

故に、大般若経に云わく「もし菩薩、たとい恒河沙劫に

みよう ごよく う ぼさつかい ぼん な

妙なる五欲を受くとも、菩薩戒においてはなにお犯と名づけ

ず。もし一念に二乗の心を起こさば、即ち名づけて犯と

いちねん にじよう こころ お すなわ な ぼん

なす」文。もんこの文に「妙なる五欲」とは、色・声・香・味・

触そくの五欲なり。ごよく色欲とは青黛・珂雪・白齒等、声とは糸竹

管絃、香とはなつかしきかおり、味とは猪鹿等の味、触と

は更らかなる膚等なり。かんげんここに恒河沙劫こうに著すとも菩薩

戒は破れず、一念の二乗の心を起こすに菩薩戒は破ると云

える文なり。かい太賢、古迹やぶに云わく「貪いちねんに汚さるといえども、

大心もん尽きず。無余たいけんの犯無こしやくきが故いに、無犯とんと名けがづく」文。二乗界

に趣おもむくを、菩薩ぼさつの破はとは申もうすなり。

華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣けごんくを、菩薩はんの破ほうとは申そうすなり。

華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣にぜんくを、菩薩きようの破にとは申ぜんすなり。

華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣にぜんくを、菩薩きようの破にとは申ぜんすなり。

華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣にぜんくを、菩薩きようの破にとは申ぜんすなり。

華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣にぜんくを、菩薩きようの破にとは申ぜんすなり。

嫌

じよう

え

りやく

ぼんもうきよう

い

かい

をきらうなり。定・慧これを略す。梵網経に云わく「戒

い

へいち

じよう

い

しったく

ちえ

をば謂つて平地となし、定をば謂つて室宅となし、智慧を

とうみよう

もん

ば灯明となす」文。

ぼさつかい

にん

ちく

おうもん

ふたなり

ししゆ

きら

この菩薩戒は、人・畜・黄門・二形の四種を嫌わず、た

いっしゆ

ぼさつかい

さず

おし

こころ

ごじゆうにい

いちいち

だ一種の菩薩戒を授く。この教えの意は、五十二位を一々

くらい

たくていこう

へ

しゆじようかい

つ

ほとけ

な

の位に多俱低劫を経て、衆生界を尽くして仏に成るべし。

いちにん

いっしよう

ほとけ

な

な

いちぎよう

一人として一生に仏に成るもの無し。また一行をもつて

ほとけ

な

いっさいぎよう

つ

ほとけ

な

みじん

つ

仏に成ることなし。一切行を積んで仏と成る。微塵を積

しゆみせん

な

んで須弥山と成るがごとし。

けごん ほうどう ほんにや ぼんもう ようらくとう きよう むねふんみよう

華嚴・方等・般若・梵網・瓔珞等の經にこの旨分明な

にじようかい かい う きら みようらく

り。ただし、二乗界のこの戒を受くることを嫌う。妙樂、

しやく い ほっけい ぜん しょきよう たず じつ

釈して云わく「あまねく法華已前の諸教を尋ぬるに、実に

にじようさぶつ もんな もん

二乗作仏の文無し」文。

つぎ えんぎよう えんぎよう ふた あ いち にぜん えん に

次に円教。この円教に二つ有り。一には爾前の円、二に

ほっけねほん えん にぜん えん ごじゆうにい かい じよう

は法華涅槃の円なり。爾前の円に五十二位、また戒・定・

え

慧あり。

にぜん えん けごんぎよう ほっかいゆいしん ほうもん もん い

爾前の円とは、華嚴經の法界唯心の法門。文に云わく

しよほつしん とき すなわ しようがく じよう えんまんしゆ

「初発心の時、便ち正覚を成ず」。また云わく「円満修

たら もん じようみようきよう い がな ぞうな じゆしやな

多羅」文。浄名経に云わく「我無く造無く受者無けれど

ぜんあく ごう はいもう もん ねはんきよう しよほつしん すなわ

も、善悪の業、敗亡せず」文。般若経の「初発心より即ち

どうじよう ぎ もん かんぎよう いだいけ すなわ

道場に坐す」の文。観経の「韋提希、ただちに即ち

むしようぼうにん う もん ぼんもんきよう い しゆじよう ぶっかい う

無生法忍を得」の文。梵網経に云わく「衆生、仏戒を受く

くらいだいかくい どう すなわ しよぶつ くらい い しん

れば、位大覚位に同じ、即ち諸仏の位に入り、真にこれ

しよぶつ こ もん みな にぜん えん しようもん

諸仏の子なり」文。これは皆、爾前の円の証文なり。

おし こころ ごじゆうにい あ な べつきよう

この教えの意は、また五十二位を明かす。名は別教の

ごじゆうにい ぎ 変 ゆえ

五十二位のごとし。ただし、義はかわれり。その故は、

ごじゆうにいたが ぐ せんじん な しょうれつ な ほんぷ
五十二位互いに具して、浅深も無く、勝劣も無し。凡夫も、
くらい へ ほとけ な おうじよう ほんのう だん

位を經ずとも仏にも成る。また往生するなり。煩惱も断
ほとけ な さわ な いちぜんいつかい ほとけ

ぜざれども仏に成るに障り無く、一善一戒をもつても仏
な しょうしょう かいえ ほうもん と ところ

に成る。少々開会の法門を説く処もあり。いわゆる
じようみようきよう ほんぷ え ほんのう あくほう みなえ

浄名經には凡夫を会す。煩惱・悪法も皆会す。ただし、
にじよう え ほんにやきよう なか にじよう がく

二乗を会せず。般若經の中には、二乗の学するところの
ほうもん かいえ にじよう ひと あくにん かいえ かんぎようとう

法門をば開会して、二乗の人と悪人をば開会せず。觀經等
きよう ほんぷ いちごう ほんのう だん おうじよう と

の經に「凡夫、一毫の煩惱をも断せずして往生す」と説く
みな にぜん えんぎよう こころ ほけきよう えんぎよう のち いた

は、皆、爾前の円教の意なり。法華經の円教は、後に至

つて書かくべし。

いじよう しきよう

已上、四教。

つぎ ごじ

次に五時

ごじ

いち

けこんぎよう

けつきよう

ぼんもうきよう

べつ

えんにきよう

五時とは、一には華嚴經（結經は梵網經）。別・円二教

と

に

あごん

けつきよう

ゆいきようぎよう

さんぞうきよう

を説く。二には阿含（結經は遺教經）。ただ三蔵教の

しょうじよう

ほうもん

と

さん

ほうどうきよう

ほうしやくきよう

かんぎようとう

小乗の法門を説く。三には方等經。宝積經・觀經等に

せつじ

し

だいじようきよう

けつきよう

ようらくきよう

して説時を知らざる大乘經なり（結經は瓔珞經）。ただ

ぞう

つう

べつ

えん

しきよう

みなと

し

はんにゃきよう

けつきよう

し、蔵・通・別・円の四教を皆説く。四には般若經（結經

にんのうきよう つうきよう べつきよう えんぎよう のちさんぎよう と さんぞうきよう
は仁王経。通教・別教・円教の後三教を説く。三蔵教
と
を説かず。

けごんきよう さんしちにち あいだ せつ あごんぎよう じゆうにねん せつ ほうどう
華嚴経は三七日の間の説、阿含経は十二年の説、方等・

はんにや さんじゆうねん せつ いじよう けごん はんにや いた
般若は三十年の説。已上、華嚴より般若に至るまでは

しじゆうにねん さんもん ぎ ほうどう せつ じさだ せつしよさだ
四十二年なり。山門の義には、方等は説時定まらず説処定ま

はんにやきようさんじゆうねん もう じもん ぎ ほうどうじゆうろくねん
らず、般若経三十年と申す。寺門の義には、方等十六年、

はんにやじゆうしねん もう ひぞう だいじ ぎ ほうどう はんにや せつ じ
般若十四年と申す。秘蔵の大事の義には、方等・般若は説時

さんじゆうねん ほうどう さき はんにや のち もう
三十年、ただし方等は前、般若は後と申すなり。

ほとけ じゆうくしゆつけ さんじゆうじようどう さだ だいろん み
仏は十九出家、三十成道と定むることは、大論に見え

いちだいししょうぎようごじゅうねん もう

ねはんぎよう み

たり。一代聖教五十年と申すことは、涅槃經に見えたり。

ほけきよう いぜんしじゅうにねん もう

むりようぎきよう み

法華經已前四十二年と申すことは、無量義經に見えたり。

ほけきよう はちかねん

もう

ねはんぎよう

ごじゅうねん

もん

法華經八箇年と申すことは、涅槃經の五十年の文と

むりようぎきよう

しじゅうにねん

もん

あいだ

かんが

はちかねん

無量義經の四十二年の文の間を勘うれば八箇年なり。

いじよう

じゅうくしゅつけ

さんじゅうじようどう

ごじゅうねん

てんぼうりん

はちじゅうにゆうめつ

已上、十九出家、三十成道、五十年の転法輪、八十入滅

さだ

と定むべし。

しじゅうにねん

せつきよう

みな

ほけきよう

きゆういん

ほうべん

これらの四十二年の説教は、皆、法華經の汲引の方便な

ゆえ

むりようぎきよう

い

われ

さき

どうじようぼだいじゆ

り。その故は、無量義經に云わく「我は先に道場菩提樹の

もと

たんざ

ろくねん

あのかたらさんみやくさんぼだい

じよう

下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ず

え

ほうべんりき

しじゅうよねん

ることを得たり○方便力をもつて、四十余年にはいまだ

しんじつ

あらわ

はじ

したい

あごんぎよう

と

つき

真実を顕さず○初めに四諦〈阿含経なり〉を説いて、次に

ほうどうじゆうにぶきよう

まかはんにや

けごんかいくう

と

もん

方等十二部経・摩訶般若・華嚴海空を説く」文。

わたくし

い

せつ

しだい

じゆん

けごん

あごん

ほうどう

私に云わく、説の次第に順ずれば、華嚴・阿含・方等・

はんにや

ほつけねはん

ほうもん

せんじん

しだい

つら

あごん

ほう

般若・法華涅槃なり。法門の浅深の次第を列ねば、阿含・方

どう

はんにや

けごん

ほつけねはん

つら

ほけきよう

ねはんぎよう

等・般若・華嚴・法華涅槃と列ぬべし。されば、法華経・涅槃経

には、かくのごとく見えたり。

み

けごんしゆう

もう

しゆう

ちごんほつし

ほうぞうほつし

ちようかんほつしとう

華嚴宗と申す宗は、智儼法師・法蔵法師・澄観法師等の

にんし

けごんぎよう

よ

た

くしやしゆう

じようじつしゆう

りつしゆう

人師、華嚴経に依つて立てたり。俱舍宗・成実宗・律宗

ほうほつし こうほつし どうせんとう にんし あごんぎよう よ た

は、宝法師・光法師・道宣等の入師、阿含経に依つて立て

ほつそうしゆう もう しゆう げんじようさんぞう じおんほつしとう ほうどうぶ

たり。法相宗と申す宗は、玄奘三蔵・慈恩法師等、方等部

うち じようしようきよう げしようきよう ぞうぶつきよう じんみつきよう げじんみつきよう

の内に上生経・下生経・成仏経・深密経・解深密経・

ゆがろん ゆいしきろんとう きようろん よ た さんろんしゆう もう

瑜伽論・唯識論等の経論に依つて立てたり。三論宗と申す

しゆう ほんにやきよう ひやくろん ちゆうろん じゆうにもんろん だいろんとう きようろん

宗は、般若経・百論・中論・十二門論・大論等の経論に

よ きちぞうだいした たま

依つて、吉蔵大師立て給えり。

げこんしゆう もう げこん ほつけ ねはん おな えんぎよう た

華嚴宗と申すは、華嚴と法華・涅槃は同じく円教と立つ。

よ みなおと い ほつそうしゆう じんみつ げじんみつきよう

余は皆劣ると云うなるべし。法相宗には、深密・解深密経

けごん ほんにや ほつけ ねはん おな ほど きよう い さんろんしゆう

と華嚴・般若・法華・涅槃は同じ程の経と云う。三論宗と

は、般若経と華嚴・法華・涅槃は同じ程の経なり、ただ

はん に や き よ う け ご ん ほ っ け ね は ん お な ほ ど き よ う
ほ っ そ う え き よ う も ろ も ろ し ょ う じ ょ う き よ う お と

し、法相の依経と諸の小乗経とは劣るなりと立つ。

み な ほ っ け い ぜ ん し ょ き よ う よ た し ゅ う

これらは、皆、法華已前の諸経に依って立てたる宗な

に ぜ ん え ん ご ぐ た し ゅ う

り。爾前の円を極として立てたる宗どもなり。宗々の

ひとびと あ ら そ あ き ょ う ぎ よ う よ し ょ う れ つ は ん と き

人々の諍いは有れども、経々に依って勝劣を判ぜん時

ほ け き よ う す ぐ に ん し し ゃ く

は、いかにも法華経は勝れたるべきなり。人師の釈をもつ

し ょ う れ つ ろ ん

て勝劣を論ずることなし。

ご ほ け き よ う も う か い き よ う わ り よ う ぎ き よ う い つ か ん

五には、法華経と申すは、開経には無量義経（二卷）、

ほ け き よ う は つ か ん け つ き よ う ふ げ ん ぎ よ う い つ か ん か み し き よ う し じ

法華経八卷、結経には普賢経（一卷）。上の四教・四時の

きようろん

か あ

ほけきよう

し

経論を書き挙ぐることは、この法華経を知らんがためなり。

ほけきよう

なら

さき

しよきよう

なら

なが

こころ

法華経の習いとしては、前の諸経を習わずしては永く心

う

にぜん

しよきよう

いつきよういつきよう

なら

を得ることなきなり。爾前の諸経は、一経一経を習うに、

よきよう

さた

くる

ゆえ

てんだい

おんしゃく

また余経を沙汰せざれども苦しからず。故に、天台の御釈

い

よきよう

ひろ

きようそう

あ

に云わく「もし余経を弘むるには、教相を明かさざれども、

ぎ

そこな

ほつけ

ひろ

きようそう

義において傷うことなし。もし法華を弘むるには、教相を

あ

もんぎか

もん

ほけきよう

い

明かさずんば、文義闕くることあり」文。法華経に云わく

しゅじゅ

どう

しめ

じつ

ぶつじよう

「種々の道を示すといえども、それ実には仏乗のためなり」

もん

しゅじゅ

どう

もう

にぜん

いつさいしよきよう

ぶつじよう

文。「種々の道」と申すは、爾前の一切諸経なり。「仏乗の

ため」とは、法華經のために一切の經をば説くと申す文なり。

と しょきよう

問う。諸經のごときは、あるいは菩薩のため、あるいは

人・天のため、あるいは

声聞・縁覚のため、機に随つて法門

もかわり、益もかわる。この經はいかなる人のためぞや。

もかわり、益もかわる。この經はいかなる人のためぞや。

やく

きよう

にん

もかわり、益もかわる。この經はいかなる人のためぞや。

こた

きよう そうでん

し

がた

あくにん

ぜんにん

答う。この經は相伝にあらざれば知り難し。悪人・善人、

有智・無智、有戒・無戒、男子・女人、四趣・八部、総じ

て十界の衆生のためなり。いわゆる、悪人は提婆達多・

じっかい

しゅじよう

あくにん

だいばだつた

て十界の衆生のためなり。いわゆる、悪人は提婆達多・

みようしようごんのう

あじやせおう

ぜんにん

いだいけとう

にん

てん

にん

妙莊嚴王・阿闍世王、善人は韋提希等の人・天の人。有智

しやりほつ むち しゆりはん 特 うかい しょうもん ぼさつ むかい
は舍利弗、無智は須利槃どく。有戒は声聞・菩薩、無戒は

りゆう ちく によん りゆうによ そう じっかい しゆじよう えん

竜・畜なり。女人は竜女なり。総じて十界の衆生、円の

いっぽう さと し がくしや ほけきよう

一法を覚るなり。このことを知らずして、学者、「法華経は

われ ぼんぷ もつ ぶつ い おそ

我ら凡夫のためにはあらず」と申す。仏意恐れあり。

きよう い いっさい ぼさつ あのくたらさんみやくさんぼだい

この経に云わく「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は、

みな きよう ぞく もん もん ぼさつ くかい しゆじよう

皆この経に属せり」と文。この文の菩薩とは、九界の衆生、

ぜんにん あくにん によん なんし さんぞうきよう しょうもん えんがく ぼさつ つうぎよう

善人・悪人、女人・男子、三蔵教の声聞・縁覚・菩薩、通教

さんじよう べつきよう ぼさつ にぜん えんぎよう ぼさつ みな きよう ちから

の三乗、別教の菩薩、爾前の円教の菩薩、皆この経の力

ほとけ な もう もん きよう

にあらずんば仏に成るまじと申す文なり。またこの経に

い やくおう おお ひとあ ざいけ しゆつけ ぼさつ どう ぎよう
云わく「薬王よ。多く人有つて在家・出家にて菩薩の道を行

ぜんに、もしこの法華經を見・聞・読・誦・書・持・供養す
ほけきよう けん もん ぞく じゆ しょ じ くよう

ることを得ること能わずんば、当に知るべし、この人はい
う あた まさ し ひと

まだ善く菩薩の道を行ぜず。もしこの經典を聞くことを
よ ぼさつ どう ぎよう きようてん き

得ることあらば、乃ちよく菩薩の道を行ず。この文は、
うえ すなわ ぼさつ どう ぎよう もん

顕然に権教の菩薩の三祇百劫・動逾塵劫・無量阿僧祇劫の
けんねん ごんきよう ぼさつ さんぎひやつこう どうゆじんごう ぶりようあそうぎこう

間の六度万行・四弘誓願は、この經に至らざれば、菩薩
あいだ ろくどもんぎよう しぐせいがん きよう いた ぼさつ

の行にはあらず、善根を修したるにもあらずという文なり。
ぎよう ぜんこん しゆ もん

また菩薩の行無ければ、仏にも成らざることも顕然なり。
ぼさつ ぎような ほとけ な けんねん

てんだい みようらく まつだい ほんぷ かんじん もん もんぐ い
天台・妙楽の末代の凡夫を勧進する文。文句に云わく
こうけん じ しょ め ひやくい びんが かいこ あ
「好堅、地に処して牙すでに百圍せり。頻伽、鼓に在つて、
こえしゆちよう すぐ もん
声衆鳥に勝れたり」文。

もん ほけきよう ごじつてんでん だいごじゆう くどく しゃく もん
この文は、法華經の五十展轉の第五十の功德を積する文
ほとけねんご ごじつてんでん と たも ごんきよう たこう
なり。仏苦ろに五十展轉にて説き給うこと、權教の多劫

しゆぎよう だいしよう くどく きよう しゆゆ けちえん
の修行また大聖の功德よりも、この經の須臾の結縁、
ぐにん ずいき ひやくせんまんおくすぐ きよう み
愚人の随喜の百千万億勝れたること經に見えつれば、こ

こころ だいしたと あらわ たま こうけんじゆ もう き
の意を大師譬えをもつて顕し給えり。好堅樹と申す木は、
いちにち ひやくい たか 生 びんが もう とり おさな もろもろ
一日に百圍にて高くおう。頻伽と申す鳥は、幼きだも諸

だいしよう とり こえ すぐ んんきよう しゅぎよう ひき もろもろ

の大小の鳥の声に勝れたり。権教の修行の久しきに諸

そうもく おそ しょうちよう たと ほっけ ぎよう すみ ほとけ

の草木の遅く生長するを譬え、法華の行の速やかに仏

な いちにち ひやくい たと んんきよう だいしよう ひじり

に成ることを一日に百困なるに譬う。権教の大小の聖を

しよちよう たと ほっけ ぼんぷ かいご こえ しゅちよう

ば諸鳥に譬え、法華の凡夫のはかなきを穀の声の衆鳥に

すぐ たと

勝るるに譬う。

みようらくだいし かさ しゃく い おそ ひとあやま

妙楽大師、重ねて釈して云わく「恐らくは、人謬つて

げ もの しょしん くどく だい はか く じようい

解せる者、初心の功德の大なることを測らずして、功を上位

ゆず しょしん あなど ゆえ いま か ぎようあさ くふか

に推り、この初心を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深き

しめ きようりき あらわ もん まっだい ぐしや

ことを示して、もって経力を顕す」文。末代の愚者、

ほけきよう じんり

「法華経は深理にしていみじけれども、我が機に叶わず」

わ き かな

い ほう あ き くだ たい もの しゃく もん

と云つて、法を挙げ機を下して退する者を釈する文なり。

みようらくだいし まつだい ほう す

また、妙楽大師、末代にこの法の捨てられんことを歎い

い えんどん き すうちよう まこと きんだい

て云わく「この円頓を聞いて崇重せざるは、良に近代に

だいじよう なら もの ぞうらん よ ゆえ ぞうまつ じよう

大乘を習う者の雑濫に由るが故なり。いわんや、像末は情

うす しんじん かはく えんどん きようほうくら み はこ み

澆く信心寡薄にして、円頓の教法蔵に溢ち函に盈つれども、

しゆい すなわ みようもく いた しょう

しばらくも思惟せず、便ち冥目に至る。いたずらに生じ、

し かつ なん いた ひとこ き

いたずらに死す。一に何ぞ痛ましきや。ある人云わく『聞い

ぎよう なんじ なん あず

て行ぜずんば、汝において何ぞ預からん』。これはいまだ

ふか くおん やく し ぜんじゅうてんしきよう

もんじゆ

深く久遠の益を知らず。善住天子経のごとくんば、『文殊は

しゃりほつ つ ほう き ぼう しょう じごく お ごうじゃ

舍利弗に告ぐ。法を聞き謗を生じて地獄に墮つるは、恒沙

ほとけ くよう もの すぐ じごく お じごく

の仏を供養する者に勝る。地獄に墮つといえども、地獄よ

い かえ ほう き じごく お ほとけ く

り出でて還つて法を聞くことを得』と。これは、仏を供し

ほう き もの きようりよう き ぼう しょう

法を聞かざる者をもつて校量とせり。聞いて謗を生ずる、

おんしゆ き しゆい つと しゆじゆう

なお遠種となる。いわんや、聞いて思惟し、勤めて修習せ

んをや』。

い いっく たましい そ ひがん

また云わく「一句も神に染めぬれば、ことごとく彼岸を

たす しゆい しゆじゆう なが しゆうこう ゆう ずいき けんもん

資く。思惟・修習すれば、永く舟航に用たり。随喜・見聞

すれば、つねに主伴しゅばんとなる。もしは取しゅ、もしは捨しゃ、耳みみに経へて

縁えんと成り、あるいは順じゆん、あるいは違い、終ついにこれに因よつて脱だつ

す「文もん。私わたくしに云いわく「もしは取しゅ、もしは捨しゃ」「あるいは順じゆん、

あるいは違い」の文もんは、肝きもに銘めいずるなり。

法華翻経後記ほつげほんぎようごき〈釈僧肇記す〉に云いわく「什じゆう〈羅什三蔵

なり〉、姚興ようこう〈王おう〉に對こたえて曰いわく『予よ、昔むかしてんじくこく天竺国あに在り

し時とき、あまねく五竺ごじくに遊あそんで大乘だいじようを尋じん討とうし、大師だいし・須梨耶しゆりや

蘇摩そまに從したがつて理味りみを餐受きんじゆす。頂いただきを摩なでてこの経きようを囑累ぞくろい

して言いわく、仏日西ぶつにちにしに隠かくれ、遺光いこう東北とうほくを照てらす。この典ふみ、東北とうほく

の諸国しよこくに有縁うえんなり。汝なんじ、慎つつしんで伝弘でんぐせよと』と文もん。私わたくし

に云いわく、天竺てんじくよりは、この日本にほんは東北とうほくの州くになり。

恵心えしんの一乗いちじよう要決ようけつに云いわく「日本にほん一州いつしゆう、円機えんき純熟じゆんじゆくせり。

朝野ちようや・遠近えんきん同じく一乗いちじように帰きし、緇素しそ・貴賤きせんことごとく成仏じようぶつ

を期ごす。ただ一師いつしとう等とうあつて、もし信受しんじゆせずんば、権ごんとやせ

ん、実じつとやせん。権ごんならば貴たつとぶべし。浄名じようみやうに云いわく『衆もろもろ

の魔事まじを覚知かくちして、その行ぎように随したがうを示しめす。善力ぜんりき方便ほうべんをも

つて、意いこころに随したがつて皆度みなどす』。実じつならば憐れあわむべし。この経きよう

に云いわく『当来世とうらいせの悪人あくにんは、仏ほとけの一乗いちじようを説ときたもうを聞きい

て、迷惑めいわくして信受しんじゆせず。法ほうを破はして悪道あくどうに墮おちん』と』文もん。

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經

みよう

げんぎ

てんだい

い

い

みよう

みよう

妙みようは、玄義げんぎへ天台てんだいに云いわく「言いうところの妙みようとは、妙みよう

ふかしぎ

な

い

ひみつ

おうぞう

ひら

は不可思議ふかしぎに名なづくるなり」。また云いわく「秘密ひみつの奥蔵おうぞうを発ひら

しやう

みよう

い

みよう

さいしやう

く。これを称しょうして妙みようとなす」。また云いわく「妙みようとは、最勝さいしやう

しゆたら

かんろ

もん

ゆえ

みよう

い

修多羅しゆたら、甘露かんろの門もんなり。故ゆえに妙みようと言いうなり」。

ほう

げんぎ

い

い

ほう

じっかいじゆうによ

法ほうは、玄義げんぎに云いわく「言いうところの法ほうとは、十界じっかいじゆう十如じゆう、

ごんじつ

ほう

い

ごんじつ

しやうき

しめ

ゆえ

ごう

権実ごんじつの法ほうなり」。また云いわく「権実ごんじつの正軌しやうきを示しめす。故ゆえに号ごうし

て法となす」。

れんげ

げんぎ

い

れんげ

ごんじつ

ほう

たと

蓮華は、玄義に云わく「蓮華とは、権実の法に譬うるな

い

くおん

ほんが

さ

たと

はちす

り」。また云わく「久遠の本果を指す。これを喩うるに蓮を

ふに

えんどう

え

たと

はな

もつてす。不二の円道に会す。これを譬うるに華をもつて

もん

す」文。

きよう

げんぎ

い

こえ

ぶつじ

しよう

きよう

経は、玄義に云わく「声、仏事をなす。これを称して経

もん

となす」文。

わたくし

い

ほっけいぜん

しよきよう

しようじよう

こころしよう

私に云わく、法華已前の諸経に、小乗は心生ずれ

ろっかい

こころめつ

しかい

つうぎよう

ば六界、心滅すれば四界なり。通教もつてかくのごとし。

にぜん べつ えん にきよう しんしょう じっかい しょうじよう
爾前の別・円の二教は、心生の十界なり。小乗の意は、

ろくどうししよう くらく しゅじよう こころ しょう なら こころ

六道四生の苦楽は衆生の心より生ずと習う。されば、心

めつ ろくどう いんが な だいじよう こころ こころ

滅すれば、六道の因果は無きなり。大乘の心は、心より

じっかい しょう げんぎよう い こころ たく えし しゅじゅ

十界を生ず。華嚴経に云わく「心は工みなる画師の種々の

ごおん つく いっさいせけん なか ほう つく

五陰を造るがごとく、一切世間の中に法として造らざるこ

となし」文。「種々の五陰」とは、十界の五陰なり。仏界を

しんぼう つく なら こころ かこ げんざい みらい じっぼう ほとけ

も心法をも造ると習う。心が過去・現在・未来の十方の仏

あらわ なら げんぎよう い ひと さんぜ いっさい

と顕ると習うなり。華嚴経に云わく「もし人、三世の一切

ほとけ りようち ほつ まさ かん

の仏を了知せんと欲せば、应当にかくのごとく観ずべし、

こころ もろもろ によらい つく

心は諸の如来を造ると」。

ほつけいぜん きよう

掟

じようぼん

じゆうあく

じごく

いんごう

法華已前の経のおきては、上品の十悪は地獄の引業、

ちゆうぼん

じゆうあく

がき

いんごう

げぼん

じゆうあく

ちくしよう

いんごう

中品の十悪は餓鬼の引業、下品の十悪は畜生の引業、

ごじよう

しゆら

いんごう

さんきごかい

にん

いんごう

さんきじゆうぜん

ろくよく

五常は修羅の引業、三帰五戒は人の引業、三帰十善は六欲

てん いんごう

うろ

ぎぜん

しきかい

むしきかい

いんごう

ごかい

はつ

天の引業なり。有漏の坐禅は色界・無色界の引業、五戒・八

かい じつかい

じゆうぜんかい

にひやくごじつかい

ごひやくかい

かみ

く

くう

むじよう

戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の上に苦・空・無常・

むが かん

しyouもん

えんがく

いんごう

ごかい

はつかいなしさんじゆじようかい

無我の観は声聞・縁覚の引業、五戒・八戒乃至三聚浄戒の

かみ ろくど

しぐ

ぼだいしん

おこ

ぼさつ

ぶつかい

いんごう

上に六度・四弘の菩提心を発すは菩薩なり、仏界の引業な

ぞう つうにきよう

ぶつしyou

さた

ぼさつ

ほっしん

り。蔵・通二教には、仏性の沙汰なし。ただ菩薩の発心を

ぶつしょう

べつ えん にきょう

しゆじょう ぶつしょう ろん

仏性という。別・円の二教には、衆生に仏性を論ず。た

べつきょう

ごころ

にじょう

ぶつしょう

ろん

にぜん

えんぎょう

だし、別教の意は、二乗に仏性を論ぜず。爾前の円教は、

べつきょう

ふ

にじょう

ぶつしょう

きたな

みな

そほう

別教に附して二乗の仏性の沙汰無し。これらは皆、麤法な

り。

いま みようほう

じっかい

たが

ぐ

と

とき

今の妙法とは、これらの十界を互いに具すと説く時、

みようほう

もう

じっかいごぐ

もう

じっかい

うち

いつかい

妙法と申す。十界互具と申すことは、十界の内に、一界に

よ くかい ぐ

じっかいたが

ぐ

ひやつぼうかい

げんぎ

余の九界を具し、十界互いに具すれば百法界なり。玄義の

に い

いっぼうかいあ

くほうかい

ぐ

すなわ

ひやつぼうかい

二に云わく「一法界有つて九法界を具すれば、即ち百法界

あ もん ほげきょう

べつ

じっかい

いんが

にぜん

きょう

有り」文。法華経とは別のことなし。十界の因果は爾前の経

に明かす。今は十界の因果互具をおきてたるばかりなり。

にぜん きょう こころ ぼさつ ほとけ な しょうもん ほとけ

爾前の経の意は、菩薩をば仏に成るべし、声聞は仏

な と ぼさつ よろこ しょうもん 歎

に成るまじなんど説けば、菩薩は悦び、声聞はなげき、

にんてんとう 思 きょう あ

人天等はおもいもかけずなんどある経も有り。あるいは

にじよう けんじ だん ろくどう い おも ぼさつ

二乗は見思を断じて六道を出でんと念い、菩薩はわざと

ぼんのう だん ろくどう う しゅじよう りやく おも

煩惱を断ぜず六道に生まれて衆生を利益せんと念う。ある

ぼさつ とんごじようぶつ み ぼさつ たくていこう しゅぎよう

いは菩薩の頓悟成仏を見、あるいは菩薩の多俱低劫の修行

み ぼんぷおうじよう むね と ぼさつ しょうもん

を見、あるいは凡夫往生の旨を説けば菩薩・声聞のため

み じん ふじようぶつ わ ふじようぶつ じん じようぶつ

にはあらずと見て、人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は

わ じようぶつ ぼんぷ おうじよう わ おうじよう しょうにん けんじだん われ
我が成仏、凡夫の往生は我が往生、聖人の見思断は我ら
ぼんぷ けんじだん し しじゆうにねん す

凡夫の見思断とも知らずして、四十二年は過ぎしなり。

しかるを、今の経にして十界互具を談ずる時、声聞の
じじよう じど み ぼさつかい ぐ ろくどまんぎよう しゆ
自調自度の身に菩薩界を具すれば、六度万行も修せず

たくていこう へ しょうもん もろもろ ぼさつ 辛 しゆ
多俱低劫も経ぬ声聞が、諸の菩薩のからくして修したり

むりようむへん なんぎようどう しょうもん ぐ 思
し無量無辺の難行道が声聞に具するあいだ、おもわざる

ほか しょうもん ぼさつ い じん 責 ごくそつ けんどん ぼんぷ
外に、声聞が菩薩と云われ、人をせむる獄卒、慳貪なる凡夫

ぼさつ い ほつけ いんい こ ぼさつかい おさ
もまた菩薩と云わる。仏もまた因位に居して菩薩界に摂め

みようかく とうかく やくそうゆほん しょうもん と い
られ、妙覚ながら等覚なり。菓草喩品に声聞を説いて云わ

なんだち ぎよう

ぼさつ どう

われ

く「汝等が行ずるところは、これ菩薩の道なり」。また我ら

ろくど

ぎよう

ろくどまんぞく

ぼさつ

もん

きよう

い

六度をも行ぜざるが六度満足の菩薩なる文。経に云わく

ろくはらみつ

しゆぎよう

え

「いまだ六波羅蜜を修行することを得ずといえども、

ろくはらみつ

じねん

ざいぜん

われ

いつかい

う

じかい

六波羅蜜は自然に在前す」。我ら一戒をも受けざるが持戒の

もの

い

もん

きよう

い

すなわ

ゆうみよう

者と云わるる文。経に云わく「これは則ち勇猛なり。こ

すなわ

しようじん

かい

たも

ずだ

ぎよう

もの

れは則ち精進なり。これを戒を持ち、頭陀を行ずる者と

な

もん

名づく」文。

と

い

しよきよう

あくにん

ほとけ

な

けこんぎよう

問うて云わく、諸経にも、悪人の仏に成るは、華嚴経の

じようだつ

じゆき

ふちようきよう

じやおう

じゆき

だいじつきよう

ばすてんし

調達の授記、普超経の闍王の授記、大集経の婆藪天子の

授記。また女人の仏に成るは、胎經の釈・女の成仏。

ちくしやう ほとけ な あごんぎやう こうじやく じゆき にじやう ほとけ な

畜生の仏に成るは、阿含經の鵠雀の授記。二乗の仏に成

ほうどう 陀羅 尼きやう しゆりやうごんきやうとう ぼさつ ほとけ な

るは、方等だらに經、首楞嚴經等なり。菩薩の仏に成る

げごんぎやうとう ぐぼく ほんぷ おうじやう かんぎやう げほんげしやうとう

は、華嚴經等。具縛の凡夫の往生は、觀經の下品下生等。

によにん によしん てん そうかんぎやう しじゆうはちがん なか さんじゆうご

女人の女身を転ずるは、双觀經の四十八願の中の三十五の

がん ほけきやう にじやう りゆうによ だいば ぼさつ じゆき

願。これらは法華經の二乗・竜女・提婆・菩薩の授記にい

変 目 変 目

かなるかわりめかある。また、たといかわりめはありとも、

しよきやう じやうぶつ 疑

諸經にても成仏はうたがいなし、いかん。

こた よ なら つた ほうもん こた あらわ

答う。予の習い伝うるところの法門、この答えに顕るべ

し。この答こたえに、法華經ほけきようの諸經しよきように超過ちようかし、また諸經しよきようの成仏じようぶつを許ゆるし許ゆるさずは聞きこうべし。秘藏ひぞうの故ゆえに顕露けんろに書かかず。

問とうて曰いわく、妙法みようほうを一念三千いちねんさんぜんと云いうこと、いかな。

答こたえて曰いわく、天台大師てんだいだいし、この法門ほうもんを覚さとり給たまいて後のち、玄義げんぎ

十卷じっかん・文句十卷もんぐじっかん・覺意三昧かくいざんまい・小止觀しょうしかん・淨名疏じようみようしよ・四念処しねんじよ・次第しだい

禪門等ぜんもんとうの多くおほの法門ほうもんを説たまき給たまいしかども、この一念三千いちねんさんぜんを

ば談義だんぎし給たまわず。ただ十界じっかい・百界ひやつかい・千如せんじよの法門ほうもんばかりにて

おわしまししなり。御年おんとしごじゆうしち五十七なつしがつの夏ころ四月けいしゆうの比ひ、荊州けいしゆうの

玉泉寺ぎよくせんじと申もうす処ところにて、御弟子みでし・章安大師しようあんだいしと申もうす人ひとに説ときき

かせ給いし止観十卷あり。上の四帖になおおしみ給いて、

たま しかんじつかん かみ しじょう 惜 たま
ろくそく ししゆざんまいとう ほうもん ご まき

ただ六即・四種三昧等ばかりの法門にてありしに、五の卷よ

じつきようじゆうじよう た いちねんさんぜん ほうもん か たま

り十境十乗を立てて一念三千の法門は書き給えり。これ

みようらくだいし まつだい ひと かんじん 宣

を妙楽大師、末代の人に勧進してのたまわく「ならびに

さんぜん しなん こ たず よ もの こころ いえん

三千をもつて指南となす○請う、尋ね読まん者、心に異縁

な もん ろくじつかん さんぜんちよう おお ほうもん よしな

無かれ」文。六十卷・三千丁の多くの法門も由無し。ただ

はじ に さんぎよう こころう

この初めの二・三行を意得べきなり。

しかん てんだい い そ いっしん じつぼうかい ぐ いっぼうかい

止観へ天台に云わく「夫れ、一心に十法界を具す。一法界

じつぼうかい ぐ ひゃつぼうかい いっかい さんじつしゆ

にまた十法界を具すれば、百法界なり。一界に三十種の

世間を具すれば、百法界には即ち三千種の世間を具す。

この三千、一念の心に在り」文。妙楽承け、釈して云わ

く「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に、成道の

時、この本理に称つて、一身一念法界に遍し」文。

日本の伝教大師、比叡山の立ちし時、根本中堂の地を引

き給いし時、地中より舌八つある鑰を引き出だしたりき。

この鑰をもつて入唐の時に、天台大師より第七代、妙楽

大師の御弟子・道邃和尚に値い奉つて天台の法門を伝え

し時、天機秀発の人たりしあいだ、道邃和尚悦んで天台の

つ　く　たま　じゅうご　きょうぞう　ひら　み　たま　じゅうし　ひら
造り給える十五の経蔵を開き見せしめ給いしに、十四を開

いて一蔵を開かず。その時、伝教大師云わく「師、この一蔵
いちぞう　ひら　とき　でんぎようだいし　し　いちぞう

を開き給え」と請い給いしに、邃和尚云わく「この一蔵は開
ひら　たま　こ　たま　すいかしやうい　いちぞう　ひら

くべき鑰無し。天台大師自ら世に出でて開き給うべし」
かぎな　てんだいだいし　よ　い　ひら　たま

云々。その時、伝教大師、日本より隨身の鑰をもつて開き
うんぬん　とき　でんぎようだいし　にほん　ずいしん　かぎ　ひら

給いしに、この経蔵開きたりしかば、経蔵の内より、光、
たま　きょうぞう　ひら　きょうぞう　うち　ひかり

室に満ちたりき。その光の本を尋ぬれば、この一念三千の
しつ　み　ひかり　もと　たず　いちねんさんぜん

文より光を放ちたりしなり。ありがたかりしことなり。そ
もん　ひかり　はな

の時、邃和尚は返つて伝教大師を礼拝し給いき。「天台大師
とき　すいかしやう　かえ　でんぎようだいし　らいはい　たま　てんだいだいし

ごしん うんぬん てんだい きようぞう しょしゃく のこ な にほん
の後身」云々。よつて、天台の経蔵の所釈は、遺り無く日本
に亘りしなり。天台大師の御自筆の観音経、章安大師の
自筆の止観、今比叡山の根本中堂に収めたり。

一、自性 自力 迦毘羅外道

二、他性 他力 漚楼僧伽外道

三、共性 共力 勒娑婆外道

四、無因性 無因力 自然外道

外道に三人あり。一には仏法外の外道へ九十五種の外道へ、
二に附仏法の外道へ小乗へ、三には学仏法成の外道へ妙法

を知らざる大乘の外道なり。

いま ほげきよう じりき さだ じりき じっかい いっさい

今の法華経は、自力も定めて自力にあらず。十界の一切

しゅじよう ぐ じ ゆえ わ み もと じ ぶっかい

衆生を具する自なるが故に。我が身に本より、自の仏界、

いっさいしゅじよう た ぶっかい わ み ぐ いま ほとけ

一切衆生の他の仏界、我が身に具せり。されば、今、仏に

な しんぶつ たりき さだ たりき

成るに、新仏にあらず。また他力も定めて他力にあらず。

たぶつ われ ほんぶ みずか ぐ ゆえ たぶつ われ

他仏も我ら凡夫の自ら具せるが故に。また他仏が我らがご

じ げんどう とも むいん りやく

とくの自に現同するなり。共と無因は略す。

ほげきよう いぜん しょきよう じっかいご ぐ あ ほとけ な

法華経已前の諸経は、十界互具を明かさざれば、仏に成

ねが かなら ぐかい うと ぐかい ぶっかい ぐ

らんと願うには必ず九界を厭う。九界を仏界に具せざるが

ゆえ かなら あく めつ ほんのう だん ほとけ な

故なり。されば、必ず悪を滅し煩惱を断じて仏には成る

だん ほんぷ み ほとけ ぐ い ゆえ

と談ず。凡夫の身を仏に具すと云わざるが故に。されば、

にんてん あくにん み うしな ほとけ な もう

人天・悪人の身をば失つて仏に成ると申す。これをば、

みようらくだいし えんりだんく ほとけ な にぜん きよう

妙楽大師は厭離断九の仏と名づく。されば、爾前の経の

ひとびと ほとけ くかい かたち あらわ ほとけ ふしぎ じんぺん

人々は、仏の九界の形を現すは、ただ仏の不思議の神変

おも ほとけ み くかい もと げん い

と思ひ、仏の身に九界が本よりありて現ずるとは云わず。

じつ 探 たも ほっけいぜん

されば、実をもつてさぐり給うに、法華已前にはただ権者

ほとけ あ じつ ほんぷ ほとけ な な

の仏のみ有つて、実の凡夫が仏に成りたりけることは無

ほんのう だん くかい いと ほとけ な ねが

きなり。煩惱を断じ九界を厭つて仏に成らんと願うは、実

じつ

には九界くかいを離はなれたる仏ほとけ無なき故なに、往生おうじようしたる実じつの凡夫ぼんぷも

無なし。人界にんかいを離はなれたる菩薩界ぼさつかい無なき故なに。ただ法華ほっけの仏ほとけの、

爾前にぜんにして十界じっかいの形かたちを現あらわして、所化しよけとも能化のうけとも、悪人あくにんと

も善人ぜんにんとも外道げどうとも云いいしなり。実じつの悪人あくにん・善人ぜんにん・外道げどう・凡夫ぼんぷ

は、方便ほうべんの権ごんを行ぎようじて真実しんじつの教おしえとうち思おもいなしおもてすぎ過し

ほどに、法華經ほけきように來きたつて、「方便ほうべんにてありけり。実じつには見思けんじ・

無明むみようも断だんぜざりけり。往生おうじようもせざりけり」なんど覺知かくちする

なり。

いちねんさんぜん べつ くわ か
一念三千は別に委しく書くべし。

きよう

にみよう

しやく

い

きよう

にみよう

この経には二妙あり。釈に云わく「この経はただ二妙

ろん

いち

そうだいみよう

に

ぜつだいみよう

そうだいみよう

のみを論ず」。一には相待妙、二には絶待妙なり。相待妙

こころ

さき

しじ

いちだいしようぎよう

ほけきよう

たい

にぜん

の意は、前の四時の一代聖教に法華経を対して爾前とこ

きら

にぜん

とうぶん

い

ほつけ

かせつ

もう

ぜつだいみよう

れを嫌い、爾前をば当分と云い法華を跨節と申す。絶待妙

こころ

いちだいしようぎよう

ほつけ

かいえ

の意は、一代聖教は法華なりと開会す。

ほけきよう

ふた

いち

しよかい

に

のうかい

また法華経に二つのことあり。一には所開、二には能開な

かいじごにゆう

もん

みな

ぶつどう

じよう

り。開示悟入の文、あるいは「皆すでに仏道を成じたり」

とう

もん

いちぶはつかんにじゆうはつぽんろくまんくせんさんびやくはちじゆうしじ

いちいち

じ

等の文、一部八卷二十八品六万九千三百八十四字、一々の字

もと

みなみよう

もんじ

のうかい

みよう

の下に皆妙の文字あるべし。これ能開の妙なり。この

ほけきよう

し

なら だん

にぜん きよう

法華経は、知らずして習い談ずるものは、ただ爾前の経の

りやく

利益なり。

あこんぎようかいえ もん

きよう い

わ

くぶ

ほう

阿含経開会の文は、経に云わく「我がこの九部の法は、

しゆじよう ずいじゆん

と

だいじよう

い

ほん

衆生に随順して説く。大乘に入るることを本となす」

うんぬん

けこんぎようかいえ もん

い

いっさいせけん

てん

にん

云々。華嚴経開会の文に云わく「一切世間の天・人および

あしゆら

みなおも

いま

しやかむにぶつ

とう

もん

はんにやきよう

阿修羅は、皆謂えり。今の釈迦牟尼仏は」等の文。般若経

かいえ

もん

あんらくぎようほん

じゆうはつくう

もん

かんぎようとう

おうじようあんらく

開会の文は、安樂行品の十八空の文。觀経等の往生安樂

かいえ

もん

みようじゆう

すなわ

あんらくせかい

ゆ

開会の文は、「ここにおいて命終して、即ち安樂世界に往

とう

もん

さんぜんかいえ

もん

ひと

むむぶつ

とな

みな

く」等の文。散善開会の文は、「二たび南無仏と称えば、皆

すでに仏道を成じたり」の文。一切衆生開会の文は、「今

さんがい

みな

わ

う

なか

しゅじょう

この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごと

わ

こ

げてんかいえ

もん

ぞつけん

きょうしよ

とくこれ吾が子なり」。外典開会の文は、「もし俗間の経書、

じせ

ごごん

ししやう

ごうとう

と

みなしやうほう

じゆん

もん

治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん」文。

とそつ

もん

にんてん

かいえ

もん

繁

出

兜率開会の文、人天の開会するところの文、しげきゆえにい

ださず。

きやう

こころえ

ひと

きやう

もん

きやう

よ

この経を意得ざる人は、経の文にこの経を読んで、

にんてん

しやう

と

もん

み

とそつ

とうり

人天に生ずと説く文を見、あるいは兜率・切利などに

至

もん

み

あんやう

しやう

もん

み

えど

いたる文を見、あるいは安養に生ずる文を見て、「穢土に

ほつけ ぎよう きよう

ぎようじや ふたいじ

おいて法華を行ぜば、経はいみじけれども、行者、不退地

いた

えど

るてん

ひさ

ごじゆうろくおくしちせんまんさい

に至らざれば、穢土にして流転し、久しく五十六億七千万歳

あした

ご

にん

ちくとう

う

きやくしやう

あいだ

の晨を期し、あるいは人・畜等に生まれて隔生する間、

みずか

くる

かぎ

な

うんぬん

じりき

自らの苦しみ限り無し」なんと云々。あるいは「自力の

しゆぎよう

なんぎようどう

とううんぬん

おそ

にぜん

修行なり。難行道なり」等云々。これは、恐らくは爾前・

ほつけ

にと

し

じしんおろ

やみ

まよ

法華の二途を知らずして、自身癡かの闇に迷うのみにあら

いつさいしゆじよう

ぶつげん

と

ひと

ず、一切衆生の仏眼これを閉ずる人なり。

とそつ

すす

しやうじやうきよう

おお

すこ

兜率を勧めたることは、小乗経に多し。少しは

だいじやうきよう

すす

さいほう

すす

だいじやうきよう

大乘経にも勧めたり。西方を勧めたることは、大乘経に

おほ みなしよかい もん ほっけ こころ とそつ そく

多し。これらは皆所開の文なり。法華の意は、兜率に即し

じつぼうぶつど うち さいほう そく じつぼうぶつど うち になてん

て「十方仏土の中」、西方に即して「十方仏土の中」、人天に

そく じつぼうぶつど うち うんぬん ほけきよう あくにん たい

即して「十方仏土の中」云々。法華経は、悪人に対しては、

じつかい あく と あくにんごげん ぐ あくにん

十界の悪を説けば悪人五眼を具しなんとすれば、悪人の

極 すく によにん そく じつかい だん

きわまりを救い、女人に即して十界を談ずれば、十界皆女人

だん ほっけえんじつ ぼだいしん おこ ひと

なることを談ず。いずれにも法華円実の菩提心を発さん人

まよ くかい こころき ひ

は、迷いの九界へ業力に引かるることなきなり。

こころ ぞん たま ほうねんしようにん いつこうねんぶつ

この意を存じ給いけるやらん、法然上人も、一向念仏の

ぎようじや せんちやく もう ふみ ぞうぎよう なんぎようどう

行者ながら、選択と申す文には、雑行・難行道には

ほつけ だいにちきようとう のぞ ところ あ くわ み

法華・大日経等をば除きたる処も有り。委しく見よ。ま

えしん おうじようようしゆう ほけきよう のぞ ほうねん

た恵心の往生要集にも、法華経を除きたり。たとひ法然

しようにん えしん ほけきよう ぞうぎよう なんぎようどう まつだい き かな

上人・恵心、法華経を雑行・難行道、末代の機に叶わず

か たも にちれん まつた 用 いちだいしようぎよう

と書き給うとも、日蓮は全くもちいべからず。一代聖教

掟 たが さんぜじつぼう ぶつだ じようごん い ゆえ

のおきてに違い、三世十方の仏陀の誠言に違する故に。

況 義 な のち ひとびと しようそく

いおうや、そのぎ無し。しかるに、後の人々の消息に、

ほけきよう なんぎようどう きよう まつだい き かな

法華経を難行道、経はいみじけれども末代の機に叶わず、

ぼう つみ じようど わた ほけきよう さごと

謗せばこそ罪にてもあらめ、浄土に過つて法華経をば覚る

うんぬん にちれん こころ 僻 ごと おぼ

べしと云々。日蓮が心は、いかにもこのことはひが事と覚

ゆるなり。こう申すもひが事にやあるらん。能く能く智人に
習うべし。なら

正嘉二年二月十四日
しょうかにねんにかつじゅうよつか

日蓮撰す。にちれんせん